

研修プログラム:日本語教育(指導)の実践交流会

「子どもの多様性が活かせることばの教育実践」

～私の実践を語り、子どもの姿に学ぶ～

1 ねらい

日本語教育・支援の現場は、子どもたちも多様（言語・文化背景、来日の経緯や滞り期間、ことばの力や認知・学力の発達状態）であれば、教育・支援現場も多様（地域の多文化化の状況、組織・団体としての考え方、日本語教育・指導の仕組み、人的配置）、そして携わる者も多様（立場・教育経験・教育観・言語指導の知識・技能）です。その現場で、教員・支援員の皆さんは、子どもたちがことばを豊かに運用する力を高めるため創意工夫をして教育・支援活動を行っています。その皆さんが相互に実践を語り合い・学び合うことを狙いとします。そのために、自身の実践について語り、具体的なアイデアを共有します。その活動を通じて、暗黙のうちに形成している「子ども観」「学習観」「言語観」など、教育活動の前提となっている考え方や信念（ビリーフ）が意識化・言語化されると思います。他の参加者との実践や子どもたちの学びの姿に関する話し合いから、自信の実践の省察に基づく気づきと、新しい発想・次なるアイデアを得ることができると思います。つまり、ご自身の実践に関する経験をもとにした学びです。

日本語指導、教科学習支援等の教育実践の経験をもとにした学びを促進するために、本研修では、コルトハーヘンの「ALACTモデル」※に基づいて、研修の活動を組み立てています。参加者の実践（行為Action）→実践の語り（行為の振り返りLooking Back on the Action）→新たな視点・味方で捉え直し（本質的な諸相への気づきAwareness of essential aspect）→アイデアの獲得（行為の選択肢の拡大 Creating alternative method of action）→次なる実践（試み Trial）のプロセスからなります（詳細は、研修資料を参照のこと）。

この実践交流活動を通じて、参加者の皆さんが次なる「子どもたち・現場・教員の多様性が活かせることばの教育」の実践に挑むために、豊かな発想と挑戦への意欲を得られるような場を創ります。

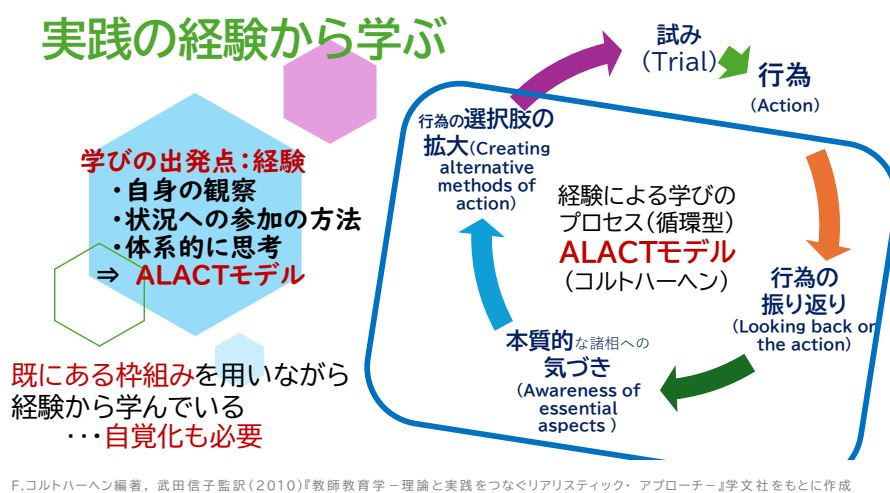
2 実践交流会の実施計画

<p>1 実践交流会の趣旨の理解</p> <p>①主催者から趣旨説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者自身の実践経験について対話する協働的な学びの場である <p>②参加者の自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名前 ・多様な言語的文化的背景をもつ子どもとのかかわり ・紹介するご自身の実践(対象の子ども、どのような教育活動か) 	20分
<p>2 実践に関する学び</p> <p>ゲストの実践の報告／ワークショップを通じて、子どもの言語教育のデザイン方法に関する情報や実践を分析する見方を得る。</p> <p><タイプ1 ゲストからの実践報告></p> <p>①ゲストからの実践の報告</p> <p>②実践についての話し合い(グループ → 全体)</p> <p>問い: 子どもたちは何を学び何ができるようになったか。</p> <p>学んだことは、在籍学級での学習や日々の生活でどう発揮されるか。</p> <p>その学びは、実践における活動や教材、支援のどのような工夫があったからか。</p> <p><タイプ2 ワークショップ></p> <p>①講師の講義</p> <p>②グループに分かれて授業づくり(学習活動の計画作成)</p> <p>③立てた計画の紹介</p>	60分

<p>3 実践交流(コルトハーヘンのALACTモデル[*]に基づき実施)</p> <p>①ALACTモデルの紹介</p> <p>②実践の紹介:自身の実践について具体的な資料(計画や教材、子どもたちの成果物や授業での子どもたちの参加の様子がわかるもの)を基に紹介し合う。</p> <p>③実践を紹介し合う活動を通じて自身の実践について気づいたこと、他の参加者の実践から学んだこと・参考になったことを個人で振り返る。</p> <p>④全体で、振り返りを共有し、意見交換を行う。</p>	<p>120分</p>
---	-------------

※F.コルトハーヘン編著, 武田信子監訳(2010)『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社

実践交流の実施前に、提示した関連資料



3 実践紹介の進め方

(1)進め方

<p>1 グループで相互に実践を紹介する (1グループ3人・1人15分) ×2セッション <15分の実践紹介の構成></p> <p>①自身の実践の紹介:</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取り組み(実践)前の問題意識:子どもたち、教室・学校の実態と設定した課題 ・取り組みの工夫:課題解決のために行ったチャレンジ、具体的な工夫 ・結果:実施した結果(現段階で、今後への期待)、今後の取り組み予定 <p>②話し合い(質問・コメント)</p>
<p>2 振り返り(ALACTモデルに即して)</p> <p>①各自、次の3点について振り返り、付箋に書き込みをする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の実践(行為:A)の新たな意味への気づき(行為の振り返り:L) ・想像していなかった子どもの姿の発見(本質的な諸相への気づき:A) ・実践のアイデアをありがとう(行為の選択肢の拡大:C) <p>②書き込んだ付箋の内容を共有し、明日からのチャレンジについて話し合う(試み:T)。</p>

(2)留意点

①参加姿勢について

経験からの学びは、実践交流への次の二つの参加姿勢が条件となる。

- ・安心して学びあえるように、共感的に実践紹介を聞く。
- ・挑戦に積極的になれるように「プラス面」を積極的にコメントする。

②倫理面

- ・紹介する内容は、実践現場の責任者の許可を得たものであること（必要に応じて保護者や同僚、子どもからも）
- ・紹介内容に、既成の教材などを利用した実践がある場合は、その出典・出所を明示・明記すること
- ・交流会で知り得た個人情報（個人、学校、地域団体）については守秘とすること
- ・交流会で紹介される教材等の創造物（知的財産）については、無断で利用しないこと

4 参考資料

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニットが2025年に実施した実践交流会の資料です。ご参考になさってください。

- ① [第1回実践交流会資料（ゲストの実践報告と実践交流）](#) [進行用スライド](#)
- [第2回実践交流会資料（ゲストの実践報告と実践交流）](#) [進行用スライド](#)
- [第3回実践交流会資料（ワークショップと実践交流）](#) [進行用スライド](#)

原瑞穂・齋藤ひろみ（東京学芸大学）・河野俊之（横浜国立大学）

②実践報告資料

- ・ [小学校「JSLカリキュラム」の事例](#) [田中寛子さん（目黒区立東根小学校）](#)
- ・ [中学校「JSLカリキュラム」の事例](#) [中村夏帆さん（愛知県岩倉市立南部中学校）](#)
- ・ [中学校「道徳科」の事例](#) [青山岳史さん（可児市立蘇南中学校）](#)
- ・ [こども園「文字指導」の事例](#) [井村美穂さん・森井えみさん（子どもの国）](#)

③ワークショップ 資料

[「内容と日本語の統合学習のデザインー『JSLカリキュラム』の実践例からー」](#)

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

本プログラム・資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。

資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。

部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。